関西学院の教育思想と新基本構想策定

矢　倉　達　夫

「関西学院100年史」をひもといてみると、「リベラルな学風」とか「知徳兼備の教育」というような言葉が散見されます。学院の創立から30年ほど後（1921年）に就任したベーツ院長の院長報告が関西学院教育の基本理念を示したものとして有名です。彼はその中で“Mastery for Service”をスクールモットーとして示しました。「人間としての自立性と世に仕えて生きる在り方」をこの言葉で簡潔に表現したものです。このとき以来、関西学院はこの言葉をスクールモットーとして掲げ、これを実現するためにキリスト教主義教育を軸とした教育活動を展開してきました。　大学が発足した当時の学則には「基督教主義ヲ基本トスル人格ノ陶冶ヲ為シ以テ国家社会ニ有用ナル人物ヲ養成」という言葉が書かれています。

このような歴史から、関西学院大学の教育には専門教育と併せてキリスト教を軸とし、それに組み合わせるかたちでのリベラルアーツ教育や人権教育が重要であるといえるでしょう。しかし1991年に行われた旧文部省の政策変更（「大学設置基準の大綱化」）によって、教養科目が自由化され、多くの大学で教養部が廃止されると同時に多くの教養科目が消えていきました。関西学院大学も例外ではなく、全学で共通に開講されていた「教養科目」の多くが無くなったり、一部の学部で学部提供教養教育科目として細々と残っているという状態になってしまいました。

「大綱化」では、教養教育の重要性を否定したわけではなく、むしろ重要性が指摘されているのもかかわらずこのような状態になってしまったわけです。
関西学院大学では、学部が独立した形で個別の教育体系（カリキュラム）を作り上げてきたという歴史があります。法制による縛りがなくなれば専門教育と関連が薄い教養系科目が消えていったのは、当然の帰結というほかありません。

現今の学生の質の変化に対応するとともに、120年を数えた関西学院の次の将来に向けた飛躍を目指す新基本構想が策定されました。その構想の中に失われたものを取り戻し、さらに未来へ向けた関西学院大学の教育の在り方を模索する施策が最重要課題の一つとして掲げられています。　2008年度から始まった、この構想の策定作業に参加したのがつい昨日のように思われるほど日時の経つのが早く感じられた一年半でした。向こう５年間の教育の基本方針と実施のためのプランを立てるというとても背負いきれない課題を与えられ、戸惑いとあせりの連続の日々だったと振り返って見て思えます。その一方で、まだ半年しか経っていない新米教務部長でしたが、この作業を通じて120年の歴史を持つ関西学院の教育の根本を流れる思想とは何か、また次の100年に向けてどのような思想を加えるべきかについて考える時間を多く持てたと感謝しています。

（理工学部教授）

All for Christ

小　見　の　ぞ　み

関西学院、そして、聖和に至るいくつかの学校を創立した宣教師ランバス一家は、「不平を言うすべを知らぬ人たち」と呼ばれていたという。よく話しをする学生が、口癖のように「そんなん、ありえんし！」と言うのだが、不平や不満の言い方自体を知らないなんて、まさにありえない。だが関学の創立者ウォルター・ラッセル・ランバスや、その母メアリー・イザベラ・ランバスの歩み